

市大時代の私の思い出

大阪市立大学地理学教室の創設50周年にあたりまして、心よりお祝い申し上げます。50年にわたる教室の長い歴史のうち、私が在籍したのは5年間に過ぎませんでした。しかしこの間、諸先生方からは多くの知を与えていただきましたし、大学院の諸先輩方からは研究に対する有意義なアドバイスをいただきました。また、大学院の同期生や後輩のみなさんには研究やプライベートな悩みの相談相手になっていただき、たいへん充実した日々を送ることができました。

今から10年前、地理学教室創設40周年にあたる1989（平成元）年4月に、私は市大の後期博士課程に入学しました。大学入学まで名古屋で過ごした後、学部を京都、大学院修士課程を横浜で送った私は、はじめて大阪で暮らすことになりました。私が5年間住んでいたのは（当時、自分ではマンションだと思っていた）1DKのアパートで、山之内4丁目にありました。このアパートに入居した当初は周辺に5階建て以上の高いビルなどなく、すぐ隣の敷地では発掘調査が行われている最中で、日曜日ともなると考古学ファンが見学に訪れていたものでした。しかし、発掘調査が終了するや否や市営住宅の建設がはじまり、あれよあれよという間に空き地がなくなっていきました。入居から3年ほど経った頃、アパートの1～2メートル隣にワンルームマンションが建って、あまりにも接近し過ぎているので私は部屋の窓を開けられなくなりました。加えてアパート自体の構造も悪く、上の部屋の電話や隣室の目覚まし時計に毎朝起こされるような、決して良好とは言えない環境でした。しかし、アパートの狭い部屋に市大の同期生や後輩たちを招き、安物の大鍋を囲んで何度となく飲み会をしていた頃が昨日のこのようで、とても懐かしいです。

秋田経済法科大学へ赴任して2年後、平成8年に現在の勤務校である摂南大学に転任しました。大阪に戻って来てすぐ市大に文献複写にうかがうと、それまでの文学部棟に代わって立派な建物が完成していました。私が大学院に在籍していた頃は、エアコンなどなく、夏は35度以上にもなる院生室で扇風機が頼みの綱でしたし、冬は建て付けの悪い窓から入ってくるすきま風のために、1台のガスストーブでは足下が冷えて仕方ありませんでした。また、現在の新棟ができるまで、地理学教室は度重なる引っ越しを経験しています。一回目の引っ越しは旧棟にエレベーターを設置することになった時で、地理学教室のあった5階では院生室と学部生室がそのスペースに当てられることになり、同じフロアの別の部屋に移りました。しかし、その部屋に落ち着く暇もなく、半年ほど後に1階に移動することになったのです。幸いにもそこは名誉教授室に当てられていた部屋だったので、エアコンが付いていて助かりました。ちなみに、その頃の先生方の部屋にはエアコンがなく、地理学教室では情報処理室が唯一涼める部屋だったのです。新棟建設にあたっては先生方大変なご苦労があったとうかがっていますが、院生や学部生もさらに数回の教室移動を強いられ、その度毎に机や椅子、本棚や書



籍、コンピュータを上階から下階へ、あるいは下階から上階へと運んだものです。そういう意味では、私が市大にいた頃が教室自体もっとも落ち着きのない時期だったと言えるでしょう。

旧棟からは見えませんでした。新棟にはじめてお邪魔した時、地理学教室の廊下側からかつて私が住んでいたアパートが本当によく見えたので、とても驚きました。もしあの頃アパートがこんなによく見えていたら、私の一日の行動がすべて知られてしまって大変なことだったなと、胸を撫で下ろしました。

取り留めもない思い出話をしましたが、市大の5年間を振り返ると次々と書きたいことが出てきます。紙面の都合もありますので、お世話になった市大の諸先生のなかで、昨年11月にお亡くなりになりました服部昌之先生の思い出話をさせていただいて、ご指導いただいた先生方への御礼に代えさせていただきたいと思えます。

大学院での服部先生の講義は、日頃の温厚なご性格とは打って変わって、結構厳しいものでした。平成3年でしたか、市大の在外研究員として先生が奥様とご一緒にドイツに滞在なさった折り、歴史地理学者イエーガー教授から謹呈された本を、大学院の講義で訳をするとおっしゃったことがありました。第二外国語がフランス語（と言っても苦手なのですが）の私にも訳が割り当てられてしまい、急遽、生協の書籍部でドイツ語の辞書や参考書を買って込んで勉強を始めました。しかし、独学では短期間に専門書を訳せるわけがありません。そこで大場先生に無理やりお願いし、週1回2時間程度、訳を見ていただくことになりました。服部先生の講義は修士と博士課程の5名が受講していましたが、1人2～3回訳の担当が回った頃、「最初はこの本をみんなで翻訳して出版しようと思っていましたが、やはり止めましょうか。」とおっしゃったので、私もやっとドイツ語から解放されました。この本の初章では、ドイツの自然地理にかなりの頁数を割いて詳細に述べていたので、先生も私たちがメインの章に入る前に息切れをしてしまったのです。

話は前後しますが、平成2年頃、吹田市役所から服部先生に近世の町並みを復元する作業の依頼があり、院生4～5名がそのお手伝いをするようになりました。吹田市役所保管の江戸後期～明治前期の町絵図や古文書をもとに、近世当時の主だったいくつかの集落について、地主や小作農家、商家などを識別していく作業でした。歴史地理学を専門としない私は先生からこの作業のお話を聞いた時、お役に立てるかどうかが不安だったのですが、絵図や古文書を前にして先生が丁寧にわかりやすく説明して下さったので、それまでの不安はいっぺんに消えました。家屋の形態などはデスクワークのみでは詳細を把握しきれないので、市内の旧農家へ聞き取り調査に出かけたことも度々ありました。1月下旬の雪の散らつく日、家屋形態の最終確認のために集落を回った時は寒さで指先がかじかみ、悲しくなってきたことを、今でも覚えています。しかし、歴史地理学の第一人者でいらっしゃる服部先生に、それこそ手取り足取り教えていただいたことは、よい経験になりました。町並みを復元した模型が吹田市の玄関ホールに飾られていることを、その後先生からうかがいましたが、残念ながら私はまだその模型を見ていません。お手伝いだったとはいえ、私にとっては大学院時代の一つの成果が形になったわけですから、近く機会をつくって是非見に行きたいと思っています。

昨年11月21日、服部先生の突然の訃報を聞き、一瞬自分の耳を疑いました。先生にお世話になった市大の諸先輩・後輩の皆様方も私と同じ気持ちだったと思えます。新文学部棟や学術情報総合センターの完成とともに、地理学教室も新しい先生や後輩たちの手によって益々の発展を遂げており、卒

業生としては本当にうれしい限りです。教室50周年という一つの節目にあたり、教室の長い歴史を刻んでこられた諸先生方の教えや先輩から受けたアドバイスを思い返す良い機会であると思います。次回60周年には、教室が今以上に発展していることを切に期待しております。

(平成6年大学院後期博士課程単位取得退学)



「いつも」きれいな院生室 (1999年秋)

